


目的：日本海岸側で用いられる冬の寝具は気候の影響を受けて吸湿し冷たく、不快であったが除湿機や布団乾燥機を含むその後の文化の発展・普及に伴ない寝具の快適性は一応の解決をみた感があった。一步進んで現在の健康指向、生活水準の一層の向上は冬季就寝状況に変化をもたらしたか、実態を知り、衣服衛生的視点での資料を得ることを目的とする。

方法：新潟県を7地域に分け、昭和61年冬季の就寝状態について、6項目の内容でアンケートと一部実態調査も行った。県の年齢別人口構成比により調査用紙4360部を配布し、その回収率は75.9%であった。

結果：1) 就寝形式は30種全とそり多様化の傾向。県全体の布団様式は48.5%を占め、わた敷布団のほとり現象がみられた。模式図で示せばの順に高率であった。また掛け布団のほかに毛布1枚を加える形式が多かった。掛けている重量は平均7.0kg、CV44.8%。3) 就寝前の暖房率の高い地域は長岡で、佐渡は33.2%と最も低かった。春種は石油ストーブおよびヒーターが共通して多かった。採暖率は山間78.5%と最も高く年齢別では年齢の増加につれ高くなった。具体的には電気毛布、敷毛布が多くその使い方は「強」で寝床内を暖ため、「弱」に切替えて就寝していた。4) 寝具の湿感有りは47.6%で10年前比で大巾な低下をみた。快適に寝る工夫は79.5%がしており、除湿と保温が中心であり10年前の希望が現実化した形となった。健康寝具も3割弱使っていた。5) 現在の就寝状態に満足している割合は30.3%で、76歳以上の男性のそれは55.6%にも達した。希望するものとしては羽毛布団、良質の毛布が高率で、布団を乾燥させる場所を希望する割合も多かった。